



Title	河上誓作名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2015, 65(2), p. 56-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57015
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【資料】

河上誓作[†]名誉教授に聞く

— 大阪大学の思い出 —

菅 真 城[‡]・阿 部 武 司[‡]

2013 年 3 月 4 日

於 大阪大学大学院経済学研究科（大阪府豊中市）

学生生活

阿部 今日は河上誓作先生のお話です。先生は、大阪大学文学部に昭和 36（1961）年 4 月に入学され、昭和 40 年 3 月に卒業されています。当時の文学部の学生生活はどのようなものだったのでしょうか。先生は引き続き大阪大学大学院文学研究科修士課程に入学され、昭和 42 年に修了されます。大学院時代で印象に残っていることについてもお話したいかと思います。よろしくお願いします。

河上 学生生活ということで、いろいろ思い出そうと考えたのですが、何よりも最初に出てくるのは寮のことです。私は 1 回生から修士 2 年を終えるまでの 6 年間、刀根山寮でお世話になりました。今は古い建物は全部壊されて新しくなっていますが、私たちの頃は米軍ハイツの建物を使用していましたので、全て洋式で、13 棟ありました。1、2 回生は 2 人部屋、3 回生以上は個室でした。昔の航空写真にはきれいに残っているのですが、ポプラの木があり、芝生で、春一番にはタンポポがたくさん咲くという、その当時、他では想像がつかないよう

な、非常にきれいな寮でした。そういう意味では、本当にいい学生生活のスタートが切れたと思います。寮費は安く、食費込みで平均して月 2,500 円前後でした。朝はきつねうどんを 2 玉食べて、昼は外食といいますか、大学の食堂で食べまして、夜は夕食があるんですが、私は仕送りがなかったものですから、もっぱらアルバイトをやっているんで、家庭教師を一晚に二つこなすこともあり、夜遅いことが多かったんです。夜遅く帰ってきますと、ときどき夕食は誰かに食べられているんです。当時はひとの夕食を食べることがよくありました。しかし、食べられても実質的に誰かが被害を受けるということとはなかったのです。というのは、夜帰ってこない学生が必ずいて、順番にひとの食べていくからです。そういう自由な、貧乏でしたが非常に楽しい学生生活でした。ちなみに当時家庭教師は週 1 回ひと月で大体 4,000 円くらいでした。

学校へは今の刀根山寮の辺りから山を越えてキャンパスに下りて行くわけです。今は中山池一つしか残っていませんが、そのころは三つ池がありまして、上が上山池、下が下山池、中が中山池ですね。上山池と下山池はもうなくなりましたが、ちょうどその上山池の南側（今の学

[†] 大阪大学名誉教授、神戸女子大学名誉教授[‡] 大阪大学アーカイブズ教授[‡] 大阪大学名誉教授、国士舘大学政経学部教授

生交流棟の南側）に通じる山道を下駄履きで下りてきたものです。当時は文学部の本館の北側に木造の建物がA棟、B棟、C棟と3棟ありまして、心理学棟と教室になっていました。

そして、その一角に学生課の分室がありました。その当時、学生課の本部は中之島でしたので、アルバイト希望者はみんな本部まで登録をしに行くのですが、登録をしても、まず返事は来ませんので、直に分室に行って「今日はアルバイトはありませんか」と圧力をかけて、そこで待っているわけです。そうしますと、電話でアルバイトの話が来ますと、すぐに頂ける。その日の場合もありますし、何日か先の場合もあります。家庭教師の場合もあれば、ほかの仕事の場合もあります。私は職員の方と仲良くなりまして、よくアルバイトを世話していただいた記憶がございます。

授業は、教養部のころは、やはり好き嫌いがありますから、きちんとやってくださる先生に対しては、こちらもしっかりノートを取って真面目にやった記憶があります。何人かの好きな先生がいて、この先生方にはいい点を頂きました。ただ、ちゃらんぼらん先生も中にはいらっしゃるもので、これは適当にということにどうしてもなってしまいますね。私は英語が好きだったので、英語とか文学、歴史関係のものは割ときっちりと授業にも出席し、予習・復習もしっかりやりました。

2年生になりまして、英語学専門の先生が着任されたということを寮の先輩から聞きました。これは九州大学から来られた毛利可信先生でしたが、新しいことをやっておられるということで関心を持ちまして、結果的には毛利先生の下で英語学を勉強することになりました。

4年生の時から大学院の英語学の授業の聴講許可をいただいたので、一生懸命聴き、分かる分からないは別として、とにかくアカデミックな雰囲気を楽しませていただきました。そうすると、自然と大学院に進学したいなという気持ち

になりました。本気で勉強するようになりました。

学部時代の一番の思い出は、卒業論文は割と早く見通しがつきましたので、それはそれできちんとやりながら、4年生の夏休みにアルバイトをしつつ、一つ大きな本を読んでやろうと取り組んだことです。昔、東京大学の英語学の創始者の一人とされている市河三喜という先生が、『カンタベリー物語』の原書を読んで中世英語をマスターしたという話を毛利先生から聞きまして、「よし、やってやろう」ということになり、ひと夏かけて、寮のポプラの木の下に机を置いて、読み続けました。一日約20ページのペースで、56日かかりました。残念ながら私は、中世英語をマスターすることはできなかったのですが、気持ちが良かったですね。本当に達成感があったというか、今も非常にいい思い出として残っています。

それから間もなく卒業、就職ということになりますが、当時は、「でもしか」先生の時代。生徒数が多かったのでしょうか、教師が足りない。それで、私は高知県出身ですが、香川県の伝統のある高校から、わが校の先生になりませんかというお誘いの手紙を頂きました。しかし、結果的には、大学院できちんと勉強をした後で機会がありましたらまた誘ってください、ということでお断りしました。

ところが大学院に進学してみますと、これが結構面白いのです。大学院の授業が割と自分に合っていたのでしょうか。海外の理論を使って分析するというのが主流でしたが、自分の感覚で分析したことが認められることがあり、自信につながっていきました。

そして、修士2年のとき、修論が早く仕上がって、日本英文学会の学会発表に応募することを薦められ、これがまた運よく通りまして、修士論文の成果で学会デビューができました。間もなく毛利先生から、博士課程に行かないで修士を出ただけでも後々論文博士になれるから、こ

こで英語学の助手をしないかと言っていたきました。

それまで英語学講座に助手はいなかったのですが、私は毛利先生が阪大に来られてから最初の文学部からの学生ということもありまして、文学部の助手に就任することになりました。その当時の私の給料が2万6,000円、教授の先生方で5万円台、6万円あるかないかぐらいだったのではないのでしょうか。

これが、だいたい学生時代の印象に残っていることです。

助手に就任

阿部 ありがとうございます。今、もう既にお話に出ておりますが、助手に就任され、ただ、その期間はそんなに長くはなく。

河上 長くなかったですね。1年と1カ月です。

阿部 その後、九州大学にかなり長くお勤めになります。

河上 はい、14年おりました。

阿部 それで、昭和57(1982)年4月に大阪大学文学部助教授に配置換えになって、平成元(1989)年8月に教授にご昇任ということでございますね。

河上 そうですね。

阿部 この間にアイオワ大学、ハーバード大学、カリフォルニア大学、ロンドン大学と、通算するとかなりの年月在外研究に従事されています。文学部の先生として、教育、研究、さらには社会貢献等といろいろなお仕事をされてきたわけですが、この間で特に印象に残っている事柄についてお話ししたく思います。

河上 はい、分かりました。一つだけ付け加えさせていただきますと、助手の時にやっていて良かったというのが一つあるんです。1年に1度、研究室のニューズレターを作ろうということになり、非常に簡単な、わら半紙1、2枚ぐらいの1年間の総括みたいなニューズレターをつくりました。大まかには、卒業していった人

たちの住所録、研究室の出来事の簡単な報告、研究室の同窓会のお知らせなどをガリ版で印刷して、「HLC (Handai Linguistic Club) News」というタイトルを付けて同窓生に配りました。

この第1号を作っただけで私は九州大学へ移ってしまったのですが、実はそれが現在まで続いております。私が阪大に戻ってきてからもずっと作り続けていて、今考えますと、これはどうやらある意味のアーカイブズですね。

誰が何時どういう卒業論文を書いて、どういうふうな学会発表をして、どのような催し物が研究室であって、誰がどこに就職していったとか、そういう記録を毎年きちんと記録していきますと、今年で48号になるのですが、記憶が少し前後しているものも、それを見たら順番を思い出し、忘れていたことがつながって参ります。

また、評価にもずいぶん役立ちます。過去何年間でどういう論文と学会発表が何点あったか、それを見たら全部分かります。そういうものの最初のきっかけを作ったということは、英語学講座初代の助手の仕事としてたいへん良かったと思います。

九州大学に配置換え

河上 ところが、九大に配置換えになりますと、教養部でしたので、がらっと様子が変わりました。昭和43(1968)年5月1日着任ですが、今ではちょっと考えられませんが、このころは大阪を朝8時過ぎの特急かもめに乗りますと、やっと夕方の5時ごろに博多に着くという時代で、九州はまだまだ遠く、飛行機に乗るにもちょっと決心のいる時代でした。

赴任して1カ月近くたった5月末に、米軍のジェット機が九大電算機センターの屋上に落下したのです。そのときから九大紛争が始まりまして、私は若いということで学生委員をさせられていましたので、日々対応に追われました。

ちょうどこの年の2月に、アメリカの原子力

潜水艦が佐世保に寄港するということがありまして、全国からヘルメットの学生が九州に集まり、九大教養部が闘争の拠点になっていました。そんな中で、米軍ジェット機の墜落事故が起きましたので、私の研究室を含め、教養部本館の研究室はすべて学生に占拠・封鎖されました。大学紛争では、阪大には阪大の歴史があったと思いますが、私はそういう紛争の中で九大生活を始めたことになります。

学生委員で若いということもあって、学生との交渉を先頭でよくさせられ、それが相当期間続きましたので、ずいぶんと鍛えられました。学生、それも自分の教え子でない学生たちとどうやってコミュニケーションを取るかと、覆面をして棒を持ち、授業粉碎のために押し掛けてきた学生たちと、いかにしてその覆面をとらせ話をするかと、体力も根気も試される場を何度も経験して、交渉能力も度胸もずいぶん鍛えられたと思います。

それから、今は中国がPM2.5など大気汚染がひどい状況ですが、当時は日本の環境汚染が一番ひどい頃でした。ちょうどアメリカでも環境問題がピークになっていて、レイチェル・カーソン（Rachel Louise Carson）の『サイレント・スプリング（Silent Spring）』（『沈黙の春』）が1963年に出て、それから日本の有吉（佐和子）さんの『複合汚染』が1974-75年の発表ですので、ちょうどそのあたりに差し掛かる前といますか、環境庁ができるのが1971年ですから、それもできてないころですね。九大の封鎖は警察が入って全面解除されるわけですが、解除した後の授業で、私はアメリカの『TIME』誌を教材に取り上げ、授業の前の週に出たばかりの環境記事を印刷しまして、英語の授業で使うということをしていました。これは学生にもずいぶん人気があって、「先生は環境のご専門ですか」と言われたりしました。そういう面白い経験がその当時は割と自由にできました。

ただ、福岡は板付に米軍の基地がまだありましたので、九大の先生方は皆、英語がよくおできになる。つまり英語の先生方はそうそうたるメンバーがたくさんおられまして、自分も外国に行ってもっと英語の能力を身につけてこななければ駄目だと痛感し、フルブライトの試験を受けまして、1970（昭和45）年9月から2年間アメリカに留学することになったわけです。

アメリカ留学

河上　ただ、フルブライト委員会で受けた試験は、なかなか倍率が高くて、何年も受け続けている人がいるから、その方たちを優先したい。けれども、別のプログラムでよければ提供しましょうということになりました。それは、アイオワ大学のプログラムで'Hill Family Foundation（ヒル家基金）Fellow'というもので、妻を連れて行けば、奨学金が倍になるというものでした。これは海外、特に日本が対象のプログラムだったのですが、「英語教育に携わっている若い人で、その訓練のためにアメリカに来る人」が対象でしたから、ちょうどでした。旅費は出さないけれども、滞在費はきちんと出すということで、妻を連れて行って2,500ドル（年額）プラスしてもらい、あと旅費は文部省からいただき、大変恵まれたものでした。その当時フルブライトでもらうお金が1,800ドルですから、1,800ドルよりは2,500ドルがいいわけだし、2人連れならなおいいと。向こうでは結婚した学生の寮というのが別にありまして、その寮に入って、非常に充実した生活を送ることができました。当時は1ドル360円の時代でしたが、生活していく上では1ドル100円の感覚でいて丁度という感じでしたから、経済的に余裕があるとは言えませんでした。

1年目は大学院のフルタイムで、大学院の科目を全部取って博士号を取って帰ってくるつもりでおりました。ところが2年目は教えないかとお誘いを受け、「日本文化入門」と「3年生

の日本語」を担当することになり、2/3が教員で1/3が院生という形になりました。「3年生の日本語」というのは、会話から新聞まで読ませるのですが、それが皆かなりできるのです。「日本文化入門」は、ライシャワー（Edwin Oldfather Reischauer）さんなどの厚い本を読ませて、レポートをどんどん書かせディスカッションをするという方法でやりました。20名ぐらい受講生がいましたが、結構ペーパーを書かせて、こちらも鍛えられました。

当時アメリカでは学生のエバリュエーション（evaluation）、つまり授業評価というのが既に始まっていて、このとき私は初めてエバリュエーションを受けるという経験をいたしました。5点満点で学生がつけるわけです。20項目ぐらいありましたが、私のスコアは平均3.9点でした。ところが私より悪いネーティブスピーカーの先生方がたくさんいるのです。次の学期の登録前に冊子になって全部公表されますので、学生はそれを参考にして、次の学期に登録するわけです。

これが1972（昭和47）年ですので、日本ではずいぶんたってから学生のエバリュエーションが始まったことになります。日本では甘い先生は人気があるとか言いますが、そういう議論は、当時アイオワでも経験しました。向こうでも甘い人はいましたが、そういう人は、やはり結果的には評価が悪くなるということになります。

アイオワ大学では勉強するほうと教えるほうと両方を経験し、休みのときはまだ子どもがいなかったものですから、最大限アメリカ旅行を楽しみました。二人ともアメリカで初めて運転免許を取得したのですが、アメリカの国立公園を中心に大自然を楽しみ、2年後の帰国時は、アイオワからアメリカ東部を回ってサンフランシスコまで43日間、車で旅行をしながら帰ってきました。これは当時のアメリカを体験し、理解する上で大変勉強になりました。

帰国後はアメリカでのいろいろな経験をどんどん授業に反映させました。2年後には所属も文学部に移り、専門を教え、大学院も担当するようになりました。ところが悪い癖で、帰国後5年ぐらいたちますとまた外国に行ってみたくなりまして、今度はハーバード大学の試験を受けました。これは書類選考のあと、向こうから試験官が来日しまして、面接試験がありました。日本で40歳前の研究者が毎年3名選ばれていました。幸い運よくパスして、1979（昭和54）年8月から1年間、ハーバード大学燕京（エンチン）研究所にVisiting Scholarとして行くことになりました。今回は子供も含め家族連れで、途中阪大に提出した博士論文の口頭試問のために12月に一時帰国しなければならないことが分かっていたので、それまでの4カ月間は妻の母親も一緒でした。宿舎は、ハーバード大学のスタッフが住んでいるBotanical Garden Apartmentに滞在させてもらえるという幸運に恵まれ、教える義務もありませんでした。

ですから、ハーバード大学の授業を聴きながら、いろいろなセミナーに参加したり、発表させていただいたりしました。その間、アメリカの歴史、文化、それから大学運営等いろいろ学ぶことができました。特に、一流の大学がどうかたちで研究者を育てているか、それから、教員がお互いにどういう交流をして刺激合っているかということが大変勉強になりました。これは後々、私が日本に帰って、阪大の文学部と文学研究科で学生を指導する際、大変参考になりました。

ハーバード大学エンチン研究所はそのころ、日本人を招請するのはもう終わりにして、これからは中国の研究者を呼ばなければならない、と中国のほうにシフトしていくような話が出始めた時期でした。

三つ目の留学先はカリフォルニア大学でした。これは、前の留学から6年ぐらいたった

ときに、アメリカの大学でPh.D.を取った研究者が主たる対象のフルブライト上級試験を受けたものです。私は残念ながらアメリカではPh.D.を取っていませんでしたが、日本で論文博士をとっていましたので受験資格はありました。ですが、面接試験も含めて大変厳しい試験でした。トップレベルが受けるものですから、あまり差がないんです。ですから、その頃第一線で活躍していた言語学者と2人で4カ月、4カ月で奨学金をシェアすることになり、1986（昭和61）年8月から4カ月間カリフォルニア大学バークレー校に留学することになりました。カリフォルニア大学では、私たちの領域では非常に有名なジョージ・レイコフ（George P. Lakoff）という認知意味論の教授の下で授業を聴かせていただいて、4カ月過ごしました。

ここで一番良かったのは、「認知科学」という新しい研究領域を知ることができたことです。言語学、哲学、心理学、論理学といった領域はすべて、人間の脳や認知能力と密接に関係しているということで、バークレー校の専門家たちが集まって、コグニティブ・サイエンス（Cognitive Science）の研究グループを組織し、研究発表会を連続してやっていました。これはすごかったです。当時の人文科学のトップにいる研究者たちが集まって、順番に新しい研究発表をしてくれるのですから、実に刺激的でした。その代わり、日本のように甘くはない。ハンドアウトをくれるわけではないんです。今は日本でも普通ですが、すべてパワーポイントを用いた発表で、展開がものすごく速いんです。画面が目の前でどんどん変わっていく。ついていかなければならないのですが、横文字のスピードに慣れてないものですから、だいたいのことで納得するかしらうがないという状態でした。

後で分かったのですが、これは彼らにも意図があって、アイデアが盗まれないためだった

んです。そのためにポイントだけをスクリーンに映す。そして、それを発表した時には、既にペーパーが出ているというかたちでやっていたのです。私たちはこの連続研究発表会を「コグサイ」と呼んでいたのですが、そのペーパーがかなり頻繁に出版されるのです。それを購入すると、新しい認知科学が今どの方向に向かい、どの程度進んでいるのかということが分かるのです。

このプログラムは、スローン・ファウンデーション（Sloan Foundation）という基金が、アメリカの認知科学の2大拠点にお金を出して、その支援によってやっているということが分かったのですが、一つはMIT（マサチューセッツ工科大学）で、もう一つはバークレー（カリフォルニア大学）です。東と西にお金を同じく与えて競わせたのです。言語学では、MITはチョムスキー（Avram Noam Chomsky）の生成文法理論、もう一方のバークレーは、レイコフたちの認知意味論が知られていました。これは実は言語学では相反する前提を持つ二つの考え方なのですが、その両方にお金を与えて、言語理論を発展させようとしたのです。私はメタファー（metaphor）やメトニミー（metonymy）を含めた研究領域に関心を持っていたのでレイコフのところへ行ったのですが、これは非常にいい刺激になりました。幸いなことに、帰国後、このジョージ・レイコフが1987年に出版した、*Women, Fire, and Dangerous Things* というよく知られた本の邦訳に関わることができました（『認知意味論—言語から見た人間の心—』池上嘉彦他訳、1993、紀伊国屋書店）。この本は、法学部などでも国際法の関係、特に犯罪心理との関わりで、人間の認知能力の中のメタファーとかメトニミーの現象、あるいはそういう認識の仕方が、犯罪とどう関わるか、法律とどう関わるかという点でも、非常に関心を持たれた本です。

最後に四度目の留学ですが、ほぼ5年後の

1991年です。今までは文部省からアイオワ行きの旅費しかもらっていなかったのですが、やっと2カ月間の在外研究が認められました。このときは時間的な制約があるため、自分の関心のある拠点校を選び、優れた研究者との交流を第一の目標にいたしました。まずUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）、それからすぐ近くなんですが、UCSB（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）を選び、主としてサンタバーバラに1カ月滞在し、研究者と交流しました。それからドイツに飛びまして、ドイツのデュイスブルグ大学、パリのパリ大学を經由してロンドン大学で3週間近く滞在し、SOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）に出入りしまして、ロンドン大学のその当時の最先端の言語理論であった関連性理論を勉強させていただきました。

このとき分かったことは、やはりこういう言語研究の拠点におられる人たちは、それぞれがみんな個性のある研究をしているということです。もちろん、各方面にアンテナは出しているのですが、自分たちの主張はきちんとしていて、個性を頑固なほどに守り、棲み分けているということが非常によく分かりました。

私たちにも、やはりそういう姿勢がもっとあっていいと思います。日本人には、一つの学問的流行があったら、それに全部が染まらなければならないというような考え方が少しあるように思うのですが、やはりもっと個性を出してもいい、特に言語の研究には、そういうのがあっていい、いや、あるべきだと思うのです。

こうした経験は、私が文学研究科に戻ってから大変役立ちました。例えば、自分が助教授を選ぶときには、自分の研究領域と違う助教授を選びました。そうすることによって、学生が私の専門領域だけでなく、違った分野も学べます。知識の範囲も広がり、各分野に対する理解が深まる。その結果、自分と違う分野の研究をしている人を避けたり、拒否したりしなくなり

ます。また、学生の研究テーマも自由に選ばせました。前提が間違えて書かれていたり、明らかにおかしいのは駄目ですが、そうではなくて、まだ十分に分からない研究領域を研究する場合は、それぞれの学生の興味に応じて、私とは違う前提に基づくものであってもやらせました。実は、これが後で非常にいい結果を生むということが分かりました。

海外の大学から得たもの

河上 ほぼ7年ごとに4度海外に留学したのですが、どの大学もそれぞれ世界的なレベルの教育環境が整っており、どういう環境で学生たちを育てているか、その教育環境をどうやってつくっているかを理解する上で、大変参考になりました。そこで私たちもできるだけそういう環境をつくるように努力したら、学生たちがもっと良くなるのではないかとということで、1982年に助教授として大阪大学文学部に戻ってきて以来、できるだけ海外の第一線の研究者を招くように努力し、また日本の他大学にきた招聘教授にも、できるだけ阪大に来てトークをしてもらうように心がけました。

トークの会も、アメリカではそんなに大げさなことはいたしません。外部から研究者が来学すると、教授がスーパーマーケットに行ってハムなどを買ってきて、スライスして出す、あとはワインとかビールなど何か飲み物を置いておく程度です。トークの後、その内容を話題にして、パーティーをやる。だからお金もかからない。インフォーマルで、それでいていろいろな人と話すチャンスがありますし、学生は世界のトップの学者と話すことができるわけです。

そうしますと、学生たちの視点が高くなるし、視野が広がります。ある意味で、ものを見る目が少し違ってくるといえますか、国際感覚が出てくるといえますか、第一線の先生方と接触できているという自信が生まれてきます。そうすると、第一線は狙わなければ駄目なんだ

という気持ちになるものですから、学会発表も目標が違ってきます。このねらいは、ある程度成功したように思います。

さらに国内的にも、できるだけ全国的に活躍しているトップレベルの先生方に集中講義に来ていただきました。そういうことに慣れてきますと、今度はどんどん学生たちが自分で動き始めますので、それでまたコネクションが広がることになります。そうなりますと全国学会で学生が発表するようになり、その結果、阪大の大学院の評価が少しずつ高まっていきます。

学会活動

河上 そのうち私も次第に学会に関わるようになり、1992（平成4）年から1996年には日本英語学会の副会長、1996年から2000年には会長を務めました。日本言語学会という学会もありますが、日本英語学会のほうが英語で書かれた言語理論を先に受け入れてきました。MITのチョムスキーの言語理論が入ってきたのも、レイコフやラネカーの言語理論が入ってきたのも英語学の分野でした。ですから、日本では、日本英語学会が理論言語学の分野では中心的な学会であるということになります。

私が学会の会長をしていたころは、会員数も多く、1,800名ぐらいでした。その後、日本認知言語学会が生まれましたので少し分散し、今は1,500名くらいです。私はいま両方の学会の顧問をしています。最近はずいぶん言語研究の幅が広がったといえます。

いずれの学会も、今や九大や阪大で教えた人たちが中堅になり、よく頑張っていて、中心的なメンバーとして活躍しております。そういう意味では、学会に貢献できたし、海外での経験がいい形で生きたのではないかと自負しております。特に阪大生は消極的な面があるというふうによく言われますので、そういう意味からも積極的な取り組みが功を奏して良かったのではないかと思います。

学位制度

河上 阪大の教養部廃止に関わることに入る前に、印象に残っていることが一つあるのですが、よろしいでしょうか。

阿部 はい、お願いします。

河上 それは学位制度の調整です。学位制度に関して、実は文学部では、非常に難しい、完成した人が出す文学博士の制度があったのですが、そこに新たに学術博士とか課程博士の制度が入ってきました。そして、大学院の重点化もあって、どんどん博士号を出せという方針に変わりました。

では、どうやって完成された学者に出すような学位と、研究者としての完成には遠いけれど、これから独立した研究者として出発する時にもらう課程博士や学術博士などの学位を併存させるのかということですが、この問題は文学部内ではかなり違和感をもって受け止められていまして、これを統合して新たに学位制度を調整するという仕事が大きな課題でした。ちょうど私が1990（平成2）年教務委員をしているころに、この問題の最終調整が行われました。最終的には、どちらの学位も同じで、制度としてはこれから課程博士中心になり、課程博士が取れなかった者が論文博士になるという認識を確認いたしました。今は論文博士というのは非常に高いポジションにあり、文学博士というのは権威があるかもしれないけれども、これから10年たったら、課程博士が主になって、課程博士が取れなかった者が論文博士になっていく。これから先5年、10年過渡期が続くだろうが、それはやむを得ないことだという認識で、そういう過渡期的な制度をつくったという記憶があります。これは、文学部教授会が非常に柔軟に対応してくださり、うまく行ったと思います。

教育課程等協議会と教養部廃止

阿部 どうもありがとうございます。それで教

養部の廃止につきましてお願いいたします。

河上 そうですね。これで教養部の廃止になります。

阿部 教養部の廃止は1990年代半ばぐらいでしたか。

河上 そうですね（1994年）。

阿部 この近くに国際公共政策研究科という大学院—今は学部も担当しますが—ができたころでしたか。

河上 そうですね。

阿部 その前に教育課程等協議会ができたのですね。

河上 そうそう、1992（平成4）年1月28日です。

阿部 このころのことについてお話ししたいと思うのですが。

河上 はい。これは先生、大変でした（笑）。実はノートがありまして、ノートにぎっしり、この教育課程等協議会の議事録を取ってあります。今申し上げましたように、1992年1月28日が第1回で、私が教授に就任したのが1989（平成1）年8月で、それから2年ちょっとたった頃です。従って、まだあまり教授としての要領も分かっていないころに文学部の代表で行ったのです。教養部廃止などということは全学的にも初めての経験ですから大変だったわけですが、1993年1月31日に私の委員としての最終の会議が終わるまで、ちょうど1年間丸々、任が続いたということです。

では、これをどういうふうにとまとめたらいいかということで、実は全部読み直して考えたのですが、あまりにも雑多なことが多くて困りました。つまり教育課程等協議会という名前は付いているのですが、この中にサブの委員会が沢山あるのです。サブの委員会を書き出してみましたが、カリキュラム小委員会、対言文打合会、専門部会、カリキュラム作成部会、教育課程等協議会と同専門部会合同会、「カリキュラム具体的作成」作業部会、専門部会「主題別」

作業部会、「事務処理方針」討議の会、それから外国語科目連絡会とか、言文英語科との打合会とか、すべて、教育課程等協議会の名の下に、委員が順次担当していくわけです。

ですから、この1年間にさまざまな経験をしたといいますか、教育課程等協議会のメンバーであるということでもって次から次へと話が進んでいきました。どうやって教育課程を改革していくかという議論ですので、実は大きくまとめると、前半は非常に大きな観点から教育課程の改革をどうするかという議論になったのです。そして、第一次まとめというのが、夏休みの前に出てきます。その第一次が出てくるまでに、割と大きな夢物語が語られまして、大阪大学の教育というのはどうあるべきかという議論が続きました。

それで後半になりますと、第二次まとめに向かって、だんだん具体化していき、細かいことを詰めていくということになりまして、最終的には語学をどうするか、単位をどうするかというような非常に細かいカリキュラムの詰めに入ります。そういうかたちで、非常に大きいところから細部にわたる議論にまでいくという、これが1年間の流れです。その間に、今言ったようなさまざまな委員会に所属いたしまして、いろんなことをやったということです。

それで、幾つか拾ってみました、こういうのが一つありました。それは、教育課程等協議会が始まって半年ぐらい経った頃、1992年7月に開かれた「大阪大学に設置したい新しい文系組織」というシンポジウムです。

これは、その当時の教養部からは長山（泰孝）先生、原田（平作）先生、文学部からは川北（稔）先生、人間科学部では井上（俊）先生、法学部では高田（敏）先生、経済学部では高木（信二）先生、言語文化部は玉井（俊紀）先生、それから理学部は伊達（宗行）先生といった先生方が、大阪大学に設置したい新しい文系組織について述べられるというシンポジウ

ムでした。

これは非常に良かったと思います。阪大がこれからどうあるべきかということを皆さん、あまり構えずに述べてくださった。その中で幾つか面白い意見がありました。「文系と理系はそもそもどこが違うのか」という（笑）ご意見、これは経済の先生が言われました。

阿部 高木さんですか。

河上 だと思います。「阪大の特色や歴史を重視する視点が必要ではないか」とおっしゃって、「文は人をつくり出すんだ。人をつくる点では阪大は劣っているんじゃないか。劣悪だと僕は思う」と。「大学を離れていくことを重視して教育するような人づくりが下手だ。社会へ出て行く人間をつくらなければいけないにもかかわらずだ。だから経済学部の学生は、いいサラリーマンにはなれるが、いい経営者にはなれない」と。こういうことをおっしゃった（笑）。これ、先生はどう思われるか分かりませんが（笑）。

阿部 いや、非常にユニークな発想をされる、大変優れた方です。

河上 ユニークな発想ですね。私はこのご意見に感心して詳しくメモを取ってあります。ある意味で、非常に優等生ぶった「阪大はどうあるべき」というような答えとは違って、根本をはっきりと言っておられるところが実に良かったと思います。

また、基礎工学部の先生もこういうことを言っていていらっしゃる。「今、情報の分野では、文系の色合いがますます濃いものになりつつある」と。「例えば、環境情報学という学問では文・理の区別がつかない。だんだんと人間に関わることに問題が移っている」と言うんですね。「だから、そういう意味で理系全体も融合していくものにするのも一つの方法じゃないか」と。理系も文系も融合していく。それで、10年先のソフトはどうなっているだろうと考えるけれども、10年先というのはわれわれの

想像を超えるものになっているかもしれないよ、ということをごここでは言っていられないんです。

基礎工学部というのは、本来ファジーな側面も追求していくということで、人間に関わることを入れていくというふうなところがあって、そのところが工学部と違う発想だったというように記憶しているのですが、人間とロボットもそうですが、ソフトと人間がどういう関係にあるかということを研究していかなければ、テクノロジーというのは、これ以上、発展しないというようなところを見通していってしまったと思います。

それから、工学部の方もこういうふうにおっしゃっています。「将来、たぶん研究テーマは、人間に関わる分野へと進むだろう」と。「両方からアプローチすべきではないか」つまり、テクノロジーと人間との両方、文・理の両方からアプローチすべきだ。10年先どうなるのかを考えると、理・文の区別は厳然としてあるのかどうか分らない。少なくとも文系だけという考え方は視野が狭いのではないかと。こういう話をしておられるのです。だから、今、実際に10年たって、現実のこの状況を見てみますと、確かに、あまり文系・理系とか言わない領域がかなり増えてきているようなところがあります。明らかに理系というのは、もちろんあると思うのですが、傾向としてはファジーな方向に動いているのではないのでしょうか。

そういう意味で、このシンポジウムは非常にいい企画でした。これは1992年の7月ですが、後期になりますと、新しく議論されたことが教育課程の中でどう生かされていったのか、というまとめに入っていきます。これは新しくできた主題別教育科目などに生かされていなければならないのですが、どうだったのでしょうか。今振り返って、現在の教育課程にそのときの成果がどれくらい生きているのか検証してみるのでもいいかもしれません。

阿部 教育課程等協議会ないし教養部廃止につきましてお話はまだおありでしょうか。

河上 はい、あります。ここで文学部の話になりますが、教養部を解体しますと、結局教養部の先生方のうち文学部に関わる先生方をお引き受けすることになります。つまり分属のかたちになるわけですから、これは、文系各部局でもいろいろ議論があったように覚えております。

文学部の場合、教養部から新たに所属される先生方と、文学部にいらっしゃる先生方の間のコミュニケーションをうまく図っていかねばなりません。文学部の先生方は、教養部の先生方を下に見るようなかたちで受け入れてはならないということがありますし、教養部の先生方も、文学部の先生方にそういう意識がある以上、われわれは文学部に行く気はないというような意識はどうしてもあるわけです。そこで、やはりセレモニーをしなくてはならないと。それで、実は11月1日に対教養部懇談会というかたちでセレモニーをやった記録が残っております。一般教育の先生方の非常に強い意見は、「一般教育をないがしろにするような改革は認めたくない。だから、文学部の先生方も必ず一般教育の経験を持つべきである。大学院教育があるからといって、そちらのほうを中心に考えて、一般教育をものすごく下にみるようなことは決してあってはならない」というもので、「そのところはどう思うか」というようなかたちで議論がありました。

これは、本当に言いにくいことをおっしゃったなということと同時に、文学部の先生方もそのところはしっかりと受け止め、結果的には、文学部は新たに移られる17名全員をまったく対等なかたちで受け入れるということになりました。

教養部の先生方が文学部に移ってきますと、教養部で担当していたコマ数を持ってくるわけです。これは文学部で分担しなければならない教養部の科目数ということになるわけですが、

それを教養部から来た先生方だけでやるのか、それともどうするかという議論になります。しかし文学部は、対等だということを認めた以上、これを文学部全教員が分担するということになる。みんなが分担してやろうということを決議せざるを得ないことになるわけですが、これは比較的楽にいったんです。これは見事だったと思います。文学部の皆さんが理解されて、そうされた。教養部解体と共に文学部がそれをどう受け入れるかというところで、一番難しいところでしたけれども、皆さんのご努力で上手に受け入れが進んだというふうに私は理解しています。

ただ一つだけ問題だったのは、当初考えていた教養部の先生方が持ってくるコマ数が、もう少し少ないだろうと期待していたのが、割と多い感じで持ってこられたことでした。これは、教養部の先生方が理系の先生方を中心に議論した中でそのように決定されたと後で聞いているのですが、こういう流れの中ではやむを得ないかなということで、最終的には、そのコマ数全部を文学部全体で受け入れるというかたちで済ませていただいた。これは、協議会の委員として非常にうれしかったことですね。非常に大人の対応をしてくださったと思います。あとは、私は英語の教師をしていましたもので、英語を中心とする外国語をどうやって改革していくかを検討する会の議長をさせられました。それで言文（言語文化部）に最終的な案をつくってもらい、そのあと各学部の、英語の授業をこうしてほしい、ああしてほしいという要望がいっぱい出てくるのを受けて、その詰めをいたしました。

そして、いわゆる専門でやる部分と一般の部分とをはっきりと切るのではなくて、上手に橋渡しをして、各学部の先生方も専門教育を持つようなかたちで英語を担当していただくとか、それぞれの学部の希望を生かすかたちで言文と接触していただくという形をとらせていただい

た記憶がございます。皆さん、大変苦勞をされて、何とかスタートを切ったということだったと思います。

文学部創立 50 周年記念シンポジウム

阿部 次に、文学研究科長としてのお仕事についてです。河上先生は平成 13（2001）年 8 月から平成 15 年 7 月まで文学研究科長を務めておられます。この間、1999 年に完成した大学院重点化ののちの研究科長として、この中期目標・中期計画の作成、組織形態の諸問題、COE の申請、外部評価の実施、新しい年報の作成、それから教育評価の対応等、法人化を控えたたくさんさんの難問に対応されておられます。この研究科長の時に重点的に取り組まれた事柄についてお話しただきたく思います。

河上 はい、分かりました。重点化は 1999 年ということでしたが、実は一つだけ追加をさせていただきたいと思います。1998 年に行いました文学部創立 50 周年記念事業というのがありまして、私は文学部長はしていませんでしたが（部長は川北稔先生）、たまたま実際の企画にかなり関係したということもございまして、これは一つ申し上げておいたほうがいいということで、簡単に触れさせていただきます。

ご記憶かもしれませんが、文学部は創立 50 周年記念行事として、「文学部は必要か—21 世紀の人文学の確立に向けて—」というシンポジウムを開きました。これは、鶴見俊輔さんに基調報告をしていただきました。パネリストに、中村桂子さん、富山太佳夫さん、グレゴリー・クラーク（Gregory Clark）さん、川北稔先生、司会が鷺田（清一）先生ということでやまして、大変盛会でございました。「文学部は必要か」というようなタイトルを出しますと、皆さんがどういう反応をされるか、大変興味深いものがありました（笑）。

サブタイトルは、「21 世紀の人文学の確立に

向けて」といたしましたものですから、このサブタイトルからだいたい意図するところはお分かりいただけたのですが、20 世紀は物質文明の時代、要するに、20 世紀は日本の経済も発展しましたし、非常に華やかな物質文明の時代、プラスの面もマイナスの面もそういうのが強い時代でしたが、21 世紀になったらそれでいいのか、21 世紀は、やはり人間を大事にするような世紀にならなければいけないのではないかということですね。

人間の研究をするのはどこかといったら、それはやはり文学部が精神的な意味においては一番中心にあるかもしれない。経済、法律、それから心理学も側面では実は全部つながっているわけですが、部局としては阪大の場合、今はそれぞれ独立して一つの学部をつくり上げている。でも、それ以外の人間の奥に関わる部分というと、全部、文学部に入ってしまうのですね。ものすごい領域があるわけです。その部分をおろそかにしていると、また 20 世紀の繰り返しになってしまう。そういう観点から人文学というものをしっかりと支えて、21 世紀にふさわしい学問をもう一回意識してみようというのが、その意図するところでした。

また、ずいぶん昔ですが、女子大生亡国論というのがありまして、こういう「文学部は必要か」といったときにその問題がちょっと横切るわけですが、実はこういうセンセーショナルなタイトルを出しながら、私たちの意図するところはそういうふうなところにもあるということを伝えたかったという、そういうシンポジウムです。

いろいろな協賛イベントもございまして、相当お金も集めて、使って、というようなことをやりましたが、この実行委員会の中で、私自身は大変いい経験をさせていただいたと思っています。これは、ちょうど重点化の直前の 1998 年のことでした。これが文学部創立 50 周年ということになります。

文学研究科長として

河上　そして1999（平成11）年に重点化が行われて、2年たった後、先ほどご紹介いただきましたように文学研究科長になりました。もう既に重点化が行われて2年もたっておりますので一つの流れが出来上がっていたわけですが、実はこの研究科長の任にあった2年間というのは、振り返ってみますと、実にたくさんの方がいました。そこで、幾つか拾っていききたいと思います。ご紹介の順序のとおりに行くかどうか分かりませんが。

まず重点化問題です。もう重点化が行われた後、1、2年たっているわけですから、意義とか必要性などというのは当然いろいろ議論されていました。要するに重点化を求める社会的な要請があったとか、それから教育研究は新しい時代に即したものにすべきであるとか、いろいろありました。

その中で、私たち大学院を担当する者が一番困ったといいますか、戸惑ったことは、重点化に伴って博士学位取得者の人数が非常に増えたことです。はっきり申しますと、前期課程は、修士課程の定員が59人から93人に増えている。また、博士後期課程は28人から45人に増えているわけですが、それでうまく機能するのかとか、果たしてそれぐらい人数を増やして、彼らが卒業していった職があるのかとか、Ph.D.を実際に取れるのか、質的にそれはどうなのかといったことですね。そういうことが問題になって、不安なままスタートを切ったわけです。

それでも、私たちは努力しました。努力しまして、件数も少しずつ上がってきました。例えば、私が任にありますが、Ph.D.の数が10件から15件に増えましたし、博士後期課程もこの年は36名が入っておりますし、なんとかクリアしつつあるかなという感じでした。

その中で、中期目標・中期計画、それから組織形態の諸問題、COEの問題、外部評価の問

題、年報作成、教育評価の問題とかいろいろ出てくるということです。これは必ずしもこの順序で来ていないのですが、かなりやりまして、いろいろな問題が出てくる、また成果を出さなくてはならないということになってまいります。主な出来事をたどりながら、この話をしていきたいと思います。

私は2001（平成13）年8月に研究科長になったのですが、それから1カ月ちょっとたった後に、「大阪大学における教育・研究・社会貢献について」という大きな全学のパネル討論会がありました。これも先ほど紹介しましたようなシンポジウムに非常に似たもので、全学で議論するというものです。パネラーは城野（政弘）先生、川北（稔）先生、宮西（正宜）先生、仁科（一彦）先生、それから白川（功）先生、岡田（正）先生、宮原（秀夫）先生でした。こういう大きな議論になりますと、やはりいろいろな先生が基本的な理念をどんどん出してくれます。幾つかメモがありますが、三つだけ紹介します。

第一に理念に関してです。大阪大学の理念がきちんと説明されているかどうか、現に教えている先生方はみんな、そういう理念を念頭において教えているのかと考えた場合、ばらばらではないか。まず言えることは、大阪大学は実学に偏重し過ぎているのではないか。もう少し虚学を大事にするようなカリキュラムを作るべきではないか。虚学というのが適当かどうか分かりませんが、実学に対しての虚学、ということは教養ということでしょうか。高い教養を身につけさせよということでしょうか。各部署はそういうことを意識して、大阪大学の教育・研究・社会貢献、全てに関して、その基本理念はどうあるべきかということを考えるべきだ、ということをおっしゃった方が一人いらっしゃいました。理系の研究科長です。

もうひとつは基礎工の教授のご意見です。卒業生が阪大の卒業生であるということにどの程

度誇りを持っているのか。どうも誇りを持って話をしている雰囲気が見えない。自分たちの学部に対しての誇りが感じられない。学生が誇りを持てるような大学・組織にするにはどうしたらいいか、そのような方向性を持つことが大事ではないかという議論ですね。

それから三つ目、これで最後ですが、大学の目標は人間づくりのはずだが、そういう教育をしているのか。特に大学院ではそれをしていないのではないか。教育の中で人間をつくっていくということの必要性を考えるべきだという主張でした。

パネルの題は、「大阪大学における教育・研究・社会貢献について」ということですが、阪大生の非常に基本的なところは一体どうなっているのか、学生たちはみんな誇りを持って学生生活を送っているのかとか、教師は卒業していく者に対して本当の人間にあるべき姿を教えているのかといった、根本を問うているということです。

これからの大学のあり方を決めていく中で、やはりこういうパネルディスカッションは意味があったと私は思いました。では、これがどういうふうに生きているか、活かされているかというのは、私たちは今の教育の現状を見て言うしかないのですが、それはなかなか難しい問題です。

今のは2001年9月の話でした。11月になりますと、設置形態の話が出てまいります。設置形態の話というのは、実は大阪外国語大学との合併の可能性という話との関わりで、2002年の8月にかけての約1年間、割と議論をされてきたことで、その一番最初が、この11月あたりです。これに関して学長がどう言ったかというと、「合併すると学生数が、1学年で500人以上、阪大に来ることになる。国立では最大の学生数を誇る大学になるけれども、この500という数を将来の財と考えるか、重荷と考えるか、どう考えるべきか。今は重荷かなというよ

うな感じがする」と、最初に言っているのです。

それから、いろいろな話が続くわけですが、2002年3月に北摂会をつくりまして、阪大と外大の代表が集まって公式にもお話をするような段階に入ってまいります。入ってまいります。その中でも、ああでもないこうでもないという議論がずっと続いていて、結局、結論が出ないままで中期目標・中期計画を書かなければならないことになります。その中でどう書くかということになったとき、議論が煮詰まっていけないわけですから、双方が独立してその可能性について独自に書くということになります。そして、将来は長期的に話を進めるというかたちで終わり、この設置形態と合併という問題はここでいったん止まります。

それからもう一つ、この同じ時期に問題になって出てきたのが、総合学術博物館設置準備委員会専門委員会というもので、これが12月には始まります。今は博物館もああいうかたちで立派なものでしたが、その一番最初ぐらいがだいたいこのころです。

最初は、埋蔵文化財の委員会があって、私が委員長。文学部の考古学研究室でやっていました。ですから、博物館がほやとした形でしか出てこない段階では、刀根山に遺跡があるのですが、その遺跡を埋文がこれからどのように活用していくかという議論が主でした。何かに活用しなかったら、あの山は取り上げられてしまうということもあったので、教育に役立つというかたちに持って行くために、あそこに何らかの施設を存在させ、埋文もそれを活用することを考えなければならない。そのためには、どうするかということで苦慮していました。

そこで実際に行ったのは、11月ぐらいから近隣市町村、池田、豊中、箕面、吹田との懇談会です。そこで、皆さん、こういう施設がありますが、皆さんの各市町村としてはどういうことを希望されますか。また、どういうかたちで

大阪大学は地域に生きるべきか、これから地域で役割を果たしていく上で、市町村のほうはどういうふうにお考えで、どういう協力をしていただだけ、また、どういうことを望んでおられるか、というようなことについて話し合いました。これを11月、12月と続けてやりました。

市町村の取り組みとしては、緑を残すべきだとか、里山活動は協力できるとか、池田にある地域の資料館ではできないような博物館みたいなものを作ってくれとか、いろいろな意見が出てきました。それを大学側が吸い取って、これに反映させるというかたちで、総合学術博物館構想が生まれ、準備委員会が動きだすわけです。

その次の段階は次の年になるのですが、人員をどこから出すかが問題になり、文学部から出すことになって、初代の館長は肥塚（隆）先生に決まりました。文学部から出したあとは理学部から1人出すということを決めて、とりあえず出発しました。これが学術博物館の始まりと経過です。

それから同じ時期、12月に入りますと、日本の大学のトップ30というプログラムがいろいろ取りざたされるようになります。阪大も準備をしなければいけない。データを集めろとなります。全学の業績がどれぐらいあって、誰がどれぐらいの業績を持っていて、各学部がどういう状況かということデータを分析するようにと。それが指示されるのが12月19日です。このトップ30というのが、実は途中で「21世紀COEプログラム」に名称変更されていくわけです。

トップ30に関してはさまざまな噂が飛び交いまして、外大との合併との関わり合いの中で、トップ30に入るためには合併をうまく生かしていろいろな計画を立てるべきではないかというような話が出るわけです。その話と外大との公式の会合とが絡んできまして、阪大と外大との第1回の公式会合が始まったのがその年

も押し迫った12月27日です。

ですから、研究科長1年目の秋に、この学術博物館が動き始め、設置形態との絡みで外大との合併問題が動き始め、それが、またトップ30と絡むかたちで動いていくということになります。外大との会合はその後ずっと続きまして、次の年の3月に入って「北摂会」というワーキンググループができ、公式に動き始めるということです。

文科大学院構想

河上 それから「新しい『国立大学法人』像について」という、かの有名な最終版が2002年3月26日に出され、28日に閣議決定がなされて、国立大学法人化が動き始めるということになります。それと同時に、「中期目標・中期計画のワークシートを作成せよ」という指示が出されます。これが4月です。

そして、そのワークシートの締め切りが8月31日ということですから、4カ月しかない。文学部の場合は委員会をつくってどんどん作業を進めていくということをやりました。そのシートに書き込むはずの外大との合併の話は途中で切れてしまっていますので、先ほど言いましたように、長期的に話を続けるというかたちで、中期目標・中期計画には双方が独自に書き込んだということです。

次に、新しいトップ30プログラムに向けて各部局で考えろということで、4月から総長ヒアリングが始まります。総長ヒアリングでは、各学部が将来に向かって設置形態等に関わるというアイデアを持っているかが問われます。これはのちにCOEとも関わってくるわけですが、まだどの部局も漠然としています。阪大の部局である以上は、よそと違うような特色をどんどん出していかなければならない。

4月23日に文学研究科の順番が回ってまいります。ここで文学部が答えたのが、文科大学院という構想です。法科大学院というのが法律

のほうに出てきましたが、その法科大学院に対応するようなかたちで文科大学院、括弧をして（国際文化交流講座）というのが付いているものです。

何を考えているかという、法学研究科のロースクール、それから経済学研究科のビジネススクールに並ぶものとして、文学部で文科大学院を考える、という発想です。これを文学研究科内に設置して、一般市民向けの講座を懷徳堂講座とは別個にやったらどうかということです。具体的にそれをやるに当たっては、外大の協力、援助を得てやる。合併するしないとは別に外大の力も借りながらやると。

私たちがこの文科大学院構想で考えた理念はいったい何かといいますと、これは今でも生きているし、非常に大事なことだと思うのですが、こういうことです。つまり、世界はグローバル化していった国際化していく時代です。行政も経済的なつながりもどんどんグローバル化しますと、日本人がどんどん外に出て行かなければならない。財界人も企業人も外国に出て行くということになるわけですが、その時に、国際関係の中で一番重要なのは、相手の国の文化への行き届いた理解と自分の国の伝統文化や現在の文化についてきちんと話すこと。相手の国の文化を理解して、自分の国の文化をきちんと話せるような深い教養とその能力ではないかと思うのです。

これは理系の方もよく言っておられたのですが、例えば、日本がいろいろなかたちで技術協力をして、よその国へ行く。技術協力に関しては徹底してきちんとしたテクノロジーを教えればいいわけですから、それを向こうは受け入れてくれる。それはOKだと。だけど、それが済んだ後でパーティーになって、お互い歓談するとなったときに、日本人は何も語るものがない。つまり自分の文化について話すこともできなければ、相手の文化に対する理解もないと。ただ、経済的なものの行き来、技術の行き来と

金をもらうという、それだけ。だから経済アニマルというか、そういうかたちだった。これが日本人が尊敬されない理由のもとになっているのではないかと。

ですから、法律とかビジネスもさることながら、もっと大事なものは、そのグローバルな国際関係の中で、本当に相手の国を理解し、自分の国の文化を相手に語れる人材を育てるような教育研究機関の存在ではないのかと。それこそ、まさしく私たち文学部ができることではないかというように考えたのです。

これが文科大学院構想で、これは鷲田先生の発想なんです。今でもその通りだと思いますし、国際交流において必要なのは、相互の文化理解に基づく相互理解、これがあるかないかでは全然違ってくるといことです。このプログラムには長期的なものと短期的なものがあって、短期的なものだったら、これから海外に出て行く人に対して、短期の2カ月、3カ月の期間で、そういう視点とか姿勢とかを私たちが教えていくという発想です。教えると教えないとは全然違ってきますから。

これをやるに当たって、関西の経済界の人たちのニーズを知り、理解も得ておかななくてはなりませんので、関西経済同友会の幹事の方に面談するとか、文部科学省の「社会人ブラッシュアップ教育」の調査研究助成金に応募するとか、この構想の実現をサポートするようお願いするいろいろな具体的なプロジェクトを実行していました。総長ヒアリングではそういう話をしました。

これを聞いて岸本（忠三）総長は、阪大の学位はよそと違うという特徴を出すことは非常にいいことだと思うし、全面的に自分は協力したいというようなことをコメントとして言っているのです。この構想を述べた時に、ほかの人たちから反対もいろいろあったのですが、岸本総長はそういう方向で対応してくださったということです。

でも、この文科大学院構想は結局結実しなかったというか、実現しなかったわけです。しかし、本当はこの精神は今でも生きていなければならない。阪大に外国語学部もできたわけですから、理系の先生方と外国語学部がきちんとタイアップして、文科大学院のような発想を補っていくならば、合併したことから来る、うちの新しい発展の一方向の可能性が見えてくるのではないかと私は思います。これが二つ目で、4月の段階の話です。

21 世紀COEプログラム

河上 それから、その年は9月、10月と動いていくわけですが、先ほど言いましたトップ30というのが非常に具体的なかたちで、「21 世紀COEプログラム」と名前が変わっていきます。そして具体的な応募要領が分かってまいります。そうなりますと、これは各部局それぞれがいろいろな案を持つようになってくるわけですが、他方で全学は科研（科学研究費補助金）を出せとプレッシャーをどんどんかけてきます。科研を出すのは秋ですが、理科系はいけれども文系が問題だと。科研も出さないようなら阪大にいてほしくないということを、はっきりと言うのです。岸本総長は厳しいです。私は文学部の研究科長ですから、部局長会議では議長のすぐ近くに座っているのですが、きついことをおっしゃって、こちらを見て、にやっと笑っているのです（笑）。ものすごいプレッシャーをかけられました。特に文系学部は科研を出すよう徹底されたいと。今となっては当たり前前の話ですが。

それからもう一つは、10月に入りまして、設置形態の関係で、基礎データをすべて徹底して集めるよう指示されました。全教官を対象にして、各部局で徹底的に inputs しろと。それで、毎月入力状況を報告書で提出すると、これが毎月の全学の部局長会議で印刷物で回されるわけです（笑）。これは本当にプレッシャーが

かりましたね。

それから、さらにはCOEのプログラムに関して、COEが取れないような部局は大阪大学の部局としてはいかがなものでしょうか、というふうなことをおっしゃる（笑）。記録には残っていないですが、それはしょっちゅうあることでした。こういう科研、基礎データ、それからCOEプログラムとかのプレッシャーが研究科長としては非常にきつい（笑）。それを教授会で言われる教授会メンバーもきついですね。要するに、結果を出していかなければいけませんから。

やがてCOEの提出に向かって進むわけですが、これは各部局が本当に一番いいものを出するのが一番良かったのですが、非常に苦勞をしました。全学の感じとしては、文学部系は信用が低かったのです。文学部系はそんなに取れないだろうということをトップが考えた。今から考えてみると、文学部は一つでも二つでも出せた可能性があった。西洋史も強かったし、芸術関係も強かったし、哲学も強かったわけですから。人科（人間科学研究科）も人科独自で出せた可能性もあります。言文（言語文化研究科）も特色のあることができたかもしれない。

しかし全学の指示は、人科・文学部・言文で一つというような制約のあるものでした。それで私も正直言って非常に困りました。その三つをまとめていくということは、それこそ一番嫌われているホチキスになりかねない、つまり、それぞれをくっつけて、特色がはっきり分らないようなものになる可能性があるのではないかと、思ったのです。

そうならないように絞って、できるだけ柔軟で、透明性があり、一貫性の持てるようなタイトルを考え、「インターフェースの人文科学」（代表は鷲田清一教授）としました。人文科学でくくって、インターフェース、つまり人間と人間のコミュニケーションを基本に置いたところにくくれるようなものを集めた形です。言文は言

語、心理のほうは当然人間のコミュニケーション、空間と空間のぶつかり合い、それに時間を入れますと歴史が出てきます。それから、人間と人間のコミュニケーション、これは倫理の問題ですね。そういうかたちでインターフェースという概念を基本において、それで人文学をくくってみようということになったわけです。しかしどうしても、みんなが本当に出したいものというより、少し薄まったものになってしまったという感じがします。そこのところは、私たちもしょうがないと思いながら、全学の方針に従ったということです。

実際に阪大全体で十幾つか出しまして、出した直後の総長の感想では、「うまくいけば九つ取れるかな。最低でも八つはいけるはずだ」とおっしゃった。コメントとしては、「本学教官として良い人材を集めることが大切であって、研究科長の責任はその意味でも非常に大きい。トップ30に入らなければ、阪大の部局としては引き下がらなければならないのではないか」というような言い方をされ、「今回出さなかったところ、駄目だったところは、どうするかを今後考えてください」と言われました。

そして、結果はご存じのとおり七つしか取れませんでした。この結果が出る前に、理系の責任者の1人が「読み違いがあった。調整すべきであった。寄せ集めで特色を消すことのないように、今後配慮したい」と発言されました。寄せ集めになると特色を消すということがある。だから、もう少し調整をやるべきだった、という反省の弁と私は受け取りました。

文学部系の結果には本当にほっとしました。「インターフェイスの人文学」は3年間で2億5,000万円取れたのです。2億5,000万という大きい。阪大は全国でも獲得額の平均値が一番高いということでした。獲得数は一番目が東大と京大で九つ、次が阪大と名大で七つでした。その後の大学のランク付けとか意識というのは、このCOEの結果で出発点がかなり出来

上がったという感じがします。

COEの応募は半分が先行しまして、次の年にあと半分が出てきますが、とにかく最初に落ちたら大変だということで、私たちはずいぶんと苦勞いたしました。でも、通って、正直言って、ほっとしました。

教育評価など

河上 それから、やがて教育評価も出てまいります。2002年11月あたりです。この頃はCOEが受かったということが分かりまして、すぐに対応する部屋を作り、お金をどんどん使っていく方向に向けてプロジェクトが組まれます。全学では雇う人は雇ってというかたちで、急ピッチで進んでいきました。報告もしなければいけない、しかし、そのためにはまずお金を使わなければならないということで大変でした。お金が有効に使われたかどうかということに関しては、いろいろ反省すべき点もたくさんあったのではないかと思います。

教育評価に関しては、その当時はまだ教育評価のサンプル調査が行われている段階で、本格実施はまだ行われていませんでした。大阪大学は、そのサンプル調査の最後の年に文学部が当たりまして、宮西（正宣）先生から連絡があり、「おめでとうございます」なんて言われたのですが（笑）。何がめでたいんやと（笑）。事前調査書というのは4月までに作らなければならない。私は8月までの任期でしたので、7月までに自己評価書を提出しなければならないということもありまして、4月までに事前調査書を作るためには、11月から作業を始めなければならないことになります。ですから早速チームをつくり、資料をどんどん集めて、コンピュータも大型の新しいのを買って、どんどん打ち込んでいくことをやりました。本当に夜遅くまで作業をして、最終的には少人数で書き上げるということをやりました。これは本当に大変でした。

評価は、よその大学と比べて特にいいということもない代わりに、とても悪いということもないということで、サンプル調査は無事終わったという印象をもっております。これはこれで良かったということです。

今は2002年の秋ぐらいから2003年の夏ぐらいまでの話を一気にしてしまったのですが、ちょっと時間は前に戻りまして、2003年3月10日に、実は「大学教育実践センター（仮称）設置検討委員会」が立ち上げられます。かつての教養部に代わり、今度は実践センターが新たに作られるということになったのです。

これも実は、文学研究科から実践センターの委員長が出てきます。溝口（宏平）先生がされることになる。溝口先生は、このお仕事のお疲れが出たのか、後々がんで亡くなられました。残念でなりません。私が研究科長を終わった後でしたが、当時の委員長職は体力的にも精神的にも本当に厳しいものでした。

それから、同じ2003年の4月16日に、「大阪大学法人化準備検討委員会」というのが設置されます。各評価室が活動を開始し、法人化に向けて準備をしている最中、8月に私が研究科長の任期を終えることになります。

年報の作成

河上 だいたいこれで中期目標、それから組織形態が外大と関わるということ、またCOEの申請で結果が出たことなどに関してのお話は終わりです。あとは年報ですね。年報と外部評価の実施ということになります。

新しい年報の作成は2003（平成15）年3月に出来上がっています。私が研究科長を辞める年の春です。これが3月に完成しているということは、だいぶ前から、1年ぐらいかけてやっているということになるわけです。それまでは、薄い年報を2年ごとに出していました。新しい年報は、その3倍近い厚さを持っています。

これにはいろいろいきさつがあって、年報の最初のほうにも書いてありますが、日ごろから私が個人的に思っていたことに起因します。と申しますのも、退官される先生方の名誉教授採用にあたって、全学の会議で業績表が回るわけですが、理系の先生方は非常に業績が多いのです。200とか300とか、多いときは600とか、非常に多い。それに比べて、文学部の先生方は、多い方で200ぐらい。一般には100か150でしょうか。ただ、はっきり違うところは、理系の先生方は共著で書いておられる論文が大部分で、文学部の先生方は、これは経済学部も法学部もほぼ一緒だと思いますが、だいたい単著です。単著が大多数で、共著でも多くてせいぜいで3人くらいです。実質的に関わっておられる方が名前に出てくるということですね。

ところが、全学の評議会などで出てくる資料の場合、そういうことに関する議論はないのです。数だけ言ってしまうというようなことがあって、印象としては理系の先生がよく勉強をしていて、文系の先生はあまり業績がないという印象が常に残ってしまう。一体なぜなのか。簡単に言えば、まさしく共著者の取り扱い方が大きく関係していると私は思っていました。

実際にそういう目で見ますと、例えば文学部で、私が指導する院生は研究室に所属するわけですが、この人たちも全国の学会で発表するわけですし、論文もきちんとしたものを書くわけです。文学部の大学院生の場合は、普通は単著のかたちで発表し、指導した先生は注とか、フットノートに謝辞を書かれるぐらいです。それを共著のかたちにするというのが、理系の論文の非常に強い傾向です。人科はどう分かりませんが、そういう差がはっきりとしてある。

もしそうだとしますと、仮に、私が1年間に10人の学生を指導し、研究論文を発表させたとして、それに関わっているという理由で私の名前をその中に入れたとしますと、私は自分の論文に加えて10個の論文を共著で出したと

いうことになるわけです。私たちの学生の当時の活躍ぶりを考えますと、24人の院生がおり、どこかで誰かが単数、複数発表をしていましたので、それに全部私の名前を入れたら、1年に2桁を優に超して名前が付くということになります。

これは、やはりどこかで不公平が生じている可能性があるということを考えまして、文学部では業績の公表に関して議論をしていただきました。新しい年報を作るに当たっては、そういう議論をした上で、文学部独自の評価のあり方を模索しました。

このほかにも、理系の場合は世界的なジャーナルとか、英語で書かなければならないとか、客観的な学問ですのでいろいろありますが、文学部の場合は、それこそ全国学会といっても非常に少ない人数の学会もありますし、定期的に横文字で出る雑誌がないようなところもたくさんあるわけですから、これは各専門分野の人々で評価をするということをやらなければ、なかなか評価ができない。客観的にやりにくいことなのです。各専門分野において評価の仕方が違うということがありまして、その部分も全部考慮しなければならない。史料の研究もありますし、書評とか、文字にならない音声・絵画の研究、そういう特殊な媒体の研究に関わる記録とかもあります。そういうものをどう評価するかという議論もした上で、やはりできるだけ報告すべきであろうということから、今までのやり方を根本的に変えて評価書を作ってみたということです。

それと同時に、国際的な観点から、日本の大学、特に文学部の研究と教育のあり方に関して意見交換をしようということで、そういう座談会もやりました。それから各研究室のデータを、しかるべき学会の中心人物に送って率直な評価をしてもらって、これを書き込むということもしました。これが新しい『年報2002』で、非常に分厚い、ページ数でいいますと472ペー

ジの評価書となりました。

これをご覧になった当時の総長の宮原（秀夫）先生には「大変説得力がある年報です」と言っていただきましたし、お送りした全国の文学部から反応が返ってきましたが、研究科長あるいはそれに代わる人たちから頂いた反応では、「今後の年報のあり方について非常に参考になる資料です」と言っていただきました。そういう意味では、私たちも良かったなと思っております。

昨日、実は偶然2012年版の年報が届いたのですが、厚さはほとんど変わりません（笑）。あれから10年たちましたが、しっかりしたものが、2年に1回出版されていますし、こういう伝統は、今後も続いてほしいと願っています。

これが年報、それからそれに関わる評価についてです。

阿部 大変な時代であると同時に、先生もずいぶんお仕事をされたと思って、感銘深く拝聴しました。

河上 いえいえ（笑）、手探りでした。手探りで進むしかしようがなかったですし、周りに動かされた部分もたくさんあります。それでいて主張はしていかななくてはならない。しかも理系の強い大学の中で、文学部がどうやって自分を主張できるかという、やはり共通の土俵を作らなければならないということです。これは経も法も一緒だと思います。だから、思い切ってこういうことをやってみたのですが、悪いようにはならなかったと私は思っております。その後、2003年、それ以後は驚田先生が宮原先生の跡を継ぐかたちになるわけですが、文系の総長がでてきて、一つの時代をつくるということになってくるわけです。阪大の文系も、そういう意味では以前と違って、外国語学部も入ってきましたし、いろいろな意味で量的には大きくなってきた。それに伴って質的なものも伴っていくということが大事なことだと思います。

対外的な活動

阿部 次に、対外的活動についておうかがいいたします。先ほども少しお話に出ましたが、先生は日本英語学会の副会長・会長をお務めになるなど、学会活動で非常に重要な役割を果たされております。また、和歌山大学教育学部、東北大学文学部、奈良女子大学文学部、九州大学文学部の外部評価委員も務めておられます。こうしたご活動につきましてお話しいただければ幸いです。

河上 はい、分かりました。学会の話は、先ほど少し触れさせていただきましたから、あまり多く語る必要はないと思いますが、やはり全国学会で役をしておりますと、自ずと私たちの大学院にスポットライトが当たります。これはメリットでありますし、院生もそれなりにしっかりした研究発表をしなければならないということになります。

会長になって事務局が来ますと、全国の先生方に対して、学会のあり方に関するきちんとした姿勢を示すのが事務局の役割になります。まず、信頼をしてもらえような事務局をつくるのが第一。実力もあるし、きちんとした組織の体制もつくれるというようなことを示していかなければなりません。これは4年間やってみて、うまくいけたと思います。

1年に1回全国大会があるわけですが、日本英語学会は当時1,800名ぐらいの会員数を保ってありましたし、大会の出席者のためにハンドブックを作るのですが、少ない時でだいたい700冊、多い時で900冊くらい作ったと思います。

心掛けたことは、各分野、例えば理論言語学、社会言語学、それから音声学とか意味論、語用論、統語論とか、たくさん領域があるわけですが、その全てを満遍なく視野に収めながら、会員がのびのびと言語研究を発展させることができるよう学会を支えることです。あまり説得力のないことでも困るので、自分も活躍し

なければならないし、院生諸君にも活躍してもらわなければならない。一つの拠点をつくっていかなければならないわけですから、絶えず気が抜けませんでした。

先ほども申しましたように、拠点をつくるための一つの方策という意味からも、全国で活躍されている先生方に集中講義に来ていただきました。そうしますと、必ずこちらも出て行かなければいけないわけです。いろいろな大学に集中講義に出かけていくということは、今なら疲れますが、当時はエネルギーもあり、充実した生活が送れたと思います。

1996年から2000年まで学会会長の仕事をしまして、これが終わって2001年から2年間文学研究科長を務めました。それから半年して2004年3月停年退官ということになりました。

実はこの続きがございまして、退官後4月から神戸女子大学教授に就任すると同時に、大阪外大の監事になりました。これは今日のお話の範囲外になるわけですが、実は大阪外大と阪大が、このあたりからまた合併の話が進み始めたのです。大阪外大の監事というのは、外大の財政的・教務的な側面の監督役で、私は教務的な側面を担当いたしました。理事会の審議状況も、阪大との統合の動きもよく分かりました。

翌年の2005年、私は神戸女子大学の学長に就任しました。学長になった後も1年間ダブって外大の監事を続けたのですが、私学の管理が非常に大変になりましたので、2006年3月でやめさせていただきました。ここで外大との縁が切れて、それからしばらくして阪大と外大の合併が実現いたしました。

学会長の経験もありましたので、全国の大学の英語学に関わる状況は手に取るように分かりました。それでいくつかの大学から外部評価の依頼が来まして、東北大学とか、九州大学にもうかがいました。東北大学、九州大学の英語学研究は、いずれも優れた伝統を持ち、評価する私の側が沢山のいい刺激をいただきました。

また、奈良女子大、和歌山大でも重要な役割をさせていただきました。それぞれの自己評価書に関して感想を述べさせていただきましたが、いずれの大学も長い歴史と伝統があり、特に奈良県、和歌山県におけるそれぞれの大学の大きな役割について認識を新たにすることができました。

阪大生へのメッセージ

阿部 最後に、現在大阪大学で学んでいる学生諸君へのメッセージを頂戴したいと思います。

河上 これもいろいろ考えてみたのですが、自分の経験からいいますと、まず第一に、やはり道具としての言語力を鍛えるというか、例えば英語が話せないよりは話せるほうが良いと思います。それから、コンピュータも使えないよりは使えるほうが良いですし、道具として使えるものは学生時代にどんどんやっておいたほうが良いかなという感じがいたします。

それから、第二に、今はややもすると海外の状況があまりにも分かりすぎるから、皆さん海外に出て行かないというかが最近のネガティブな傾向としてよく指摘されるのですが、これくらいグローバルな時代になりますと、どんどん出て行ったほうが良いと思います。たぶん外国語がよく話せるようになれば、出て行きたくなるのではないのでしょうか。

第三に、外国語が話せるようになりますと、ものの考え方の違いがお互いに分かるようになりますので、先ほどの文科大学院の話ではありませんが、よその国のことが分かるよう教養を身につけることが大事だと思います。それから自分の国のことが話せるような教養も身につけておくと、レベルの高い対話が成立するようになります。そうなりますと、余裕をもって国際的に立ち向かえるし、コミュニケーションがやりやすくなってくると思います。

以上申し上げましたように、若い人たちにま

ず身につけてほしいのは、言語、コンピュータ、それから教養です。こういうものが将来活躍する上での基本になるのではないのでしょうか。

個人的なことですが、留学生として、私も外国で大変お世話になりました。そのお返しとして、今度は私が外国から来た学生諸君を支援する番だと思っています。また、同時に日本から外国へ行く学生に対しても、ポジティブな支援をしていくことが大事だと思っています。世界はそんなに怖がらなくていいということを伝えたいですね。

今はいろいろな事件がありますから実際は怖いですが、やはりもう一次元意識を高めて、いろいろな意味で自信を持って、積極的になっていただきたいのです。本当の意味で言葉ができて、相手の国を理解し、相手の国の言葉を話せるという人であって初めて国際的に認められる基盤ができるのであって、そういう大きい目標をもった人間を目指して、活動してほしいと思います。

先ほど出てきました、阪大生は誇りを持たないとか、持っている人が少ないとか、母校に対する愛情がないとかいうのも、阪大に限ってのことではなく、どこの大学でも言える傾向かもしれません。

私は今、たまたま文学部・文学研究科の同窓会の会長をやっているのですが、今の時代はなかなか同窓会に入ってもらえません。同窓会をどうやって発展させていったらいいのだろうというようなことを考えるのです。同窓会に加入する人が少ないのは、同窓会というものに魅力もメリットもないからかもしれませんし、あるいは大阪大学に対して、出て行ったら出て行っただけで、もう関心がなくなることなのかもしれません。そうならないために、私たちがどう大阪大学の雰囲気づくりをするかということが、今問われているのではないかと思うのです。

実は、お話をいただいてからずいぶんと資料などを読み返してみたりして、私も意識が若返りました。おかげさまで、ほこりをかぶっていたノートを読み返しましたので（笑）。ああそうだったんだ、こうだったんだと思いますことが多く、懐かしく振り返りながらノートをまとめましたし、逆に嫌なことも思い出したりもしました。

嫌なことのひとつとしては、やはり教育課程等協議会の厳しい雰囲気の中でやっていくうちに、一度ちょっと体調を壊したことがありました。それ以来、健康には気を付けています。どうしても 40 代前後で一度疲れが出てくるということがありますので、先生方には体力も養ってほしいし、また、息抜きもしてほしいです（笑）。とりとめのない話で申し訳ありませんでした。

阿部 長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

河上誓作名誉教授略歴

1940 年 4 月 島根県木次町で生まれる
 1959 年 3 月 高知県立須崎高等学校卒業
 1961 年 4 月 大阪大学文学部文学科入学
 1965 年 3 月 大阪大学文学部文学科卒業
 1965 年 4 月 大阪大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻入学
 1967 年 3 月 大阪大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻修了
 1967 年 4 月 大阪大学助手文学部
 1968 年 5 月 九州大学助手教養部
 1969 年 4 月 九州大学講師教養部
 1970 年 9 月 米国アイオワ大学 Hill Family Foundation Fellow（1972 年 8 月まで）
 1975 年 4 月 九州大学助教授文学部
 1979 年 8 月 米国ハーバード大学エンチン研究所 Visiting Scholar（1980 年 8 月まで）

1979 年 12 月 文学博士（大阪大学）
 1982 年 4 月 大阪大学助教授文学部
 1986 年 8 月 米国カリフォルニア大学バークレー校フルブライト上級研究員（同年 12 月まで）
 1989 年 8 月 大阪大学教授文学部
 1991 年 7 月 文部省短期在外研究員（カリフォルニア大学ロサンゼルス校、同大学サンタバーバラ校、ロンドン大学など）（同年 9 月まで）
 1996 年 4 月 日本英語学会会長（2000 年 3 月まで）
 1998 年 4 月 大阪大学評議員（1999 年 3 月まで）
 1999 年 4 月 大阪大学教授大学院文学研究科
 2001 年 8 月 大阪大学大学院文学研究科長（2003 年 7 月まで）
 2004 年 3 月 大阪大学停年退職
 2004 年 4 月 大阪大学名誉教授
 神戸女子大学教授（2010 年 3 月まで）
 神戸女子大学文学研究科長（2005 年 3 月まで）
 大阪外国語大学監事（2006 年 3 月まで）
 2005 年 4 月 神戸女子大学・神戸女子短期大学学長（2007 年 7 月まで）
 2008 年 9 月 大阪大学文学部・文学研究科同窓会会長（2015 年 3 月まで）
 2010 年 4 月 神戸女子大学特任教授（2011 年 3 月まで）
 2011 年 4 月 神戸女子大学名誉教授

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Seisaku Kawakami

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Seisaku Kawakami on the history of Osaka University. He entered Faculty of Letters at Osaka University in 1961, who lived at school dormitory, worked at a part-time job, and was interested in English linguistics very much. After Professor Kawakami further studied it at the graduate school of the same university during the period from 1965 to 1967, he became Assistant Professor at the above faculty, and moved to Kyushu University, where he experienced student riot and studied at the University of Iowa in the U.S.A. for two years after September 1970. He came back to Faculty of Letters at Osaka University in 1982 as Associate Professor, and was promoted to Professor in 1989. At Osaka University Professor Kawakami often conducted his research at the following overseas universities; Harvard University, University of California (Berkeley, Los Angeles and Santa Barbara) and SOAS. And he fostered many excellent students and developed Graduate School of Letters. He worked as a member of Council on Education Reform of Osaka University to reorganize the Department of Liberal Arts in the early 1990s, and as President of the English Linguistic Society of Japan during the period of 1996-2000. In August 2001 Professor Kawakami was elected Dean of Graduate School of Letters. For two years Dean Kawakami endeavored to tackle such difficult problems around national universities as the drastic reform of graduate school system, the adoption of administrative agency system, the establishment of Museum of Osaka University, the 21st Century Center of Excellence Program, the university evaluation, and so on. In 2004 he retired from Osaka University, moved to Kobe Women's University, and worked as its President in 2005-2007.

